韓国の病院見聞記（シーズンⅡ－⑮）

韓国と日本の鉄道病院、世界の医療列車

金城大学　社会福祉学部
社会福祉学科　教授
福永 肇
Hajime Fukunaga

ソウルの街にある大学病院跡に連れて行って頂いた。目的地に着くと、廃墟となった病院が金網フェンスで囲われていた。そして敷地の一部に茶褐色煉瓦表装の建物が、88年前の竣工当時のままの姿で立っていた。「旧・龍山（ヨンサン）鉄道病院本館」の建物である。この建物を見ると同時に「これは大変貴重な病院の歴史遺産だ」と欣喜雀躍した。日本が戦前、海外で運営していた病院の実物を、正にこの眼で見られるからである。そのような病院医蹟は今日ではもうほんの僅かしか残っていない。例えば以前、この「世界の病院から」で案内した「大韓医院（京城帝国大学附属病院）」の建物（現・ソウル大学病院医学歴史博物館）も数少ないこうした医蹟の一つであった。今回の「世界の病院から」では、このソウルの鉄道病院の医蹟からスタートし、古今・東西の鉄道関係の病院を紹介したい。具体的には①龍山鉄道病院、②日本の鉄道病院、③世界の医療列車の3つである。

なお文中の年号は西暦表記を基本とし、必要に応じ和暦を併記した。日本では日本史は和暦で把握するので、和暦表示は便利だ。日本社会では和暦が主に使われている。しかし外国の方には和暦の文章はかなり難物であるようだ。世界の国で、公文書に自国の暦の使用を指定している国はもはや日本だけである。

■ 植民地経営と病院（オランダの事例）

現在の日本は国策に「病院丸ごと輸出」を掲げている。実は太平洋戦争敗戦までの日本は、現在とは比較にはならない程の病院海外展開をしていた。1945年以前であるので、少なくとも70年以上前の話になる。これから観ていくソウルの「龍山（ヨンサン）鉄道病院（当初は龍山同仁病院）」の開設は111年前のことになる。これは驚きである。日本の病院開設地は、野戦病院・軍陣病院を省いても中国、関東州、満州、台湾、朝鮮、樺太、東南アジア（現在の香港、フィリピン、シンガポール、ミャンマー、インドネシア）、南洋（パラオ）、ブラジル、ハワイと広範囲になっている。旧宗主国や敗戦国の病院を日本が占拠して継続使用した例も一部ある。昔の日本は、なんとグローバルであったことか。

帝国主義時代、列強国は赤道に近い土地でプランテーション経営を始めた。すぐさま持続的に多発する風土病に悩まされる。植民地経営には熱帯病の研究と治療が必須となった。熱帯病とは、マラリア、コレラ、天然痘、黄熱、デング熱、赤痢といった高温多湿地方特有の感染病（伝染病）である。宗主国は、植民地に駐在・移住する自国民への母国並みの医療提供だけでなく、感染病であることから原住民（現地人）への保健衛生医療も行った。つまり近代国家として面子を保つ必要、換言すれば原住民に「ええかっこ」をする必要があった。保健衛生上の必要性に加え、宗主国が威信を保つ上からも植民地への医療投資はせざるを得なかった。

植民地への医療投資は必須であったとの話をオランダを例に紹介する。少し長くなる。1602年、オランダ東インド会社がアムステルダムに設立された。世界最初の株式会社である（後に国営会社）。オランダ領東インド（蘭印）とは現在のインドネシアの地域になる。オランダ東インド会社はバタヴィア（現在のジャカルタ）や長崎に商館という支店を出し、永年に亘って莫大な富を得る。

オランダは植民地の東インドに対しては原住民愚民化政策を採用し、基本的に教育は禁止した。20世紀になり世界の批判を受けて、ようやく1901年に3年制の初等学校を開校する。しかし教育を施した子供は僅かであった。そのようなオランダでさえ原住民への医学教育には投資を行っていた。私はそこに注目した。バタヴィアのオランダ人ボッシュ医務局長は1851年に「原住民医学校」を建て、現住民に西洋医学を教え、原住民の医療は原住民医師（Dr.ジャワ）に診させようとした。好意的に解釈すれば「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教える」という植民地政策だ。ボッシュはジェンナーの牛痘痂と種苗を1849年に長崎に送った医師である。そしてバタヴィアに次ぐ2校目のオランダの原住民医学校が、長崎に1867年に開校された幕府立「医学伝習所」である。私はそのように歴史を読んだ。

国営オランダ東インド会社の軍艦に勤務している若い二等軍医の船医ポンペ（オランダ人）一人だけが教師として日本に送り込まれる。ポンペは頑張った。オランダ国の植民地施策である原住民医師育成目的の医学校開設（1857年）と一人だけの教授に止まらず、幕府を説き伏せて資金を拠出させ、臨床教育用病院の開設（1861年）も果たす。オランダの目論見は成功し、日本はその後、自国民の西洋医を自分の費用で育成し始める。医学校の方は1874年（明治7年）に閉校になってしまう。しかし病院の方は、紆余曲折はあったが、今日の長崎大学病院に至っている。現存する日本の病院の中で歴史が一番長い病院である。

余談である。江戸時代、オランダは日本に西洋医学の一部は教えた。それは蘭方医学とか紅毛流医学といわれる。しかし「病院」という医療施設の存在は、オランダは日本には全く教えなかった。そのことを私は発見した。オランダは英、仏、独、米、露に比して弱体化した幕末にようやく病院という施設やシステムをポンペ経由で日本に伝えたのである。

1940年、ナチス・ドイツはオランダを占領する。それを受けた日本軍は1942年に蘭印に侵攻し占領した。オランダは341年間支配した宝の島を日本に奪われ、世界に冠たる繁栄国であった歴史を終える。その後、ポンペ所縁の長崎医科大学附属病院に爆弾が落ちた。

19世紀末に、帝国主義の国として最も遅いスタートを切った日本も植民地経営に乗り出し、支配地に病院や医学校を設置展開していった。外地の病院を管轄するのは日本政府ではなく、軍政もしくは総督府であった。「総督府」とは戦前の日本がいわゆる外地を統治するために設置した官庁（政府）で、台湾総督府、朝鮮総督府、関東総督府（後の関東都督府）、樺太庁、南洋庁があった。敗戦日本が外地から撤退するどさくさの中で、総督府や病院が保管していた病院記録は焼却になったり散逸したりしてしまった。戦前海外にあった日本の病院を知る資料は多くはない。日本の帝国主義時代の占領地への施策には功罪の両面があるであろう。しかし日本が海外で行った医療への客観的評価を行うためにも、当時の海外病院の活動を調査研究し、きちんと整理記録しておく必要はありそうだ（戦前の日本の海外病院の展開については拙著『日本病院史』ピラールプレス社、2014年を参照して頂きたい）。

さて、今回の「世界の病院から」での第一話は戦前の朝鮮の鉄道病院の話である。時代と場所を明治時代の朝鮮半島に移したい。

■ ソウルの鉄道病院

1905年（明治38年）の第二次日韓協約によって日本は大韓帝国（李氏朝鮮）を保護国とした。「総監府」が京城（現在のソウル）に置かれた。1910年（明治43年）、日韓併合によって総監府は「朝鮮総督府」に改称される。朝鮮半島のすべての行政・軍事は朝鮮総督府が統括した。朝鮮総督府は鉄道局を持った。官営鉄道である。今回紹介するのはこの朝鮮総督府鉄道がソウルで運営した「鉄道病院」である。「龍山（ヨンサン）鉄道病院」とか「京城（キョンソン）鉄道病院」と呼ばれることもある。

■ 同仁会

話を少しだけ脱線して、「同仁会」という日本の病院団体を説明しておきたい。戦前の海外の病院を知ろうとする時に、同仁会を外すとスカスカになってしまう。同仁会は1902年（明治35年）に設立され、1946年（昭和21年）までの44年間活動した財団法人である 。同仁会の目的は「清韓その他アジア諸国に医学およびこれに随伴する技術を普及せしめ且つその国と日本の人民の健康を保護し病苦を救済する」であり、清韓（清国と大韓帝国）その他アジア諸国への医師派遣や病院・診療所開設を行った。政界・医学界・財界が後ろ盾になり、運営費は国庫補助金と寄附金であった。命令を受けた医師や看護婦は海を渡って、外地での医療提供を支えた。日本人にとって大陸は生き方のスケールが違った。その時代の医療者も、海外雄飛への憧れと開拓魂を持っていた。それもなかなか立派である。

同仁会病院は中国に多いが、朝鮮でも1906年（明治39年）に平壌（ピョンヤン）、1907年（明治40年）に大邱（テグ）に病院を開設、附属医学校も開設している。今回紹介する龍山（ヨンサン）鉄道病院も最初は同仁会病院の運営にて1907年（明治40年）にスタートしている。

同仁会は1946年（昭和21年）、連合軍最高司令官総本部（GHQ）の指令により解散されられた。同仁会は、表面上は民間団体であるが、実態は政府の一機関として日本の植民地政策や軍事拡大政策を医学と医療の側面から協力する役割を担っていたとGHQは解釈したようだ。

同仁会病院と似た立場にいた病院に、日赤病院がある。日本赤十字社は前身になる博愛社の創設（1877年）の時から、大日本帝国陸軍を擁護者にして、陸軍用の看護婦育成と病院整備をしてきた。太平洋戦争では、全ての日赤病院が陸軍病院に編入している。GHQは陸軍・海軍病院は整理後国立病院に移管し、同仁会病院は解散させた。日赤病院も存続可否が検討される。結果、陸軍という背骨を換骨することを条件に日赤病院は戦後に存続した。日赤病院の展開は国内が主であった（海外は朝鮮と台湾、中国、臨時でパリ、病院船）のに対し、同仁会病院は外地だけで国内にはなかったことが、GHQに「同仁会は解散」という判断を容易にしたと推測される。敗戦国日本には外交権はなかった。在外公館や領事館は 全面閉鎖された。世界の赤十字社は病院を保有していない（例外として南アフリカと、日赤病院を後継した韓国、北朝鮮、台湾、中国に若干ある）。外国人にとって92もある日赤病院はきっと不思議な病院であろう。

■「龍山鉄道病院」

朝鮮半島での鉄道敷設の初期は保健衛生施設は皆無であった。当時もっとも憂慮された疾病は、天然痘、腸チフス、赤痢、朝鮮風邪（パラチブス）という感染症（伝染病）であった。1904年（明治37年）以降、同仁会から韓国に派遣された鉄道医（依嘱医）は鉄道社員だけでなく、同仁会の趣旨から朝鮮人への医療にも献身した。韓人（朝鮮人）の男性は外科的疾患に対しては鉄道医の診療を受けた。しかし韓人の女性患者は稀であったそうだ。女性患者はいても患部のごく一部を露出するだけで、全身の診断を受けることを拒否したという。また当時の朝鮮では「温薬」が一般に慣用され、日本の「冷薬」は都会の朝鮮人にも容易に信用されなかったそうだ（「温薬」とはどの様な薬なのだろうか。湯で溶いた漢方薬なのだろうか）。韓人の種痘受入れには時間を要したという。無料種痘の実施によってようやく種痘の必要性への自覚が始まる。私は朝鮮の種痘は「韓国医学近代化の父」と呼ばれる医師チソギョン（池錫永）が努力して普及させていたと思い込んでいたので、この事実は意外だった。鉄道沿線での日本人産婆は極めて少なく、初期の病院運営、医療提供には夏の解熱用氷塊や牛乳の欠乏といった不安も多かったそうだ（以上は『朝鮮鐵道史　第一巻』「第20章　保健衛生（pp.688-693）」、朝鮮總督府鐵道局編・刊、1929年を参照した）。

朝鮮統監府鉄道局は同仁会の大熊重信会長と交渉し、同仁会の医師や医療関係者を朝鮮に派遣してもらい、従業員や家族の疾病に対処した。しかし鉄道網の整備拡大に伴って依嘱医の増員だけでは地方従業員への保健衛生の不安が膨らんでくる。そこで朝鮮統監府は同仁会との間で医療提供に関する委託契約を締結し、1907年（明治40年）に「龍山同仁病院」を開院させる（開院したのは「鉄道局ソウル診療所」との記録もある）。

1911年（明治44年）に鴨緑江横断鉄橋が完成し、朝鮮総督府鉄道（鮮鉄）と南満州鉄道（満鉄）とが繋がった。つまり釜山から満州への鉄道が貫通した。関釜連絡船（下関－釜山）を介して人や物資が内地から朝鮮・満州へ運ばれていった。龍山駅は、陸軍の広大な操車場もあり、鉄道物流の拠点となった。1923年（大正12年）に京城駅（現在のソウル駅）が出来るまで龍山駅が朝鮮半島で一番大きな駅であった。龍山には日本陸軍の朝鮮軍司令部があったことから軍や鉄道関係の日本人が多く住む街となった。龍山同仁病院は鉄道局の従業員とその家族を主な患者とし、余力で局外者の治療も行った。

龍山同仁病院は1913年（大正2年）に「龍山鉄道病院」に改称。その後同仁会との契約は解消され、鉄道局の直営になった。1929年（昭和4年）に鉄筋コンクリート造り茶褐色煉瓦表装の建物が立てられ、その建物が今日まで残っている病院本館である（写真1）。訪問時（2017年2月）は竣工88年目になる。現在は閉鎖され、建物内には入れない。

写真1：1929年に建設された旧・龍山鉄道病院本館。風雪に耐え2008年、韓国の登録文化財第428号に指定された。

写真2：旧・龍山鉄道病院本館。左奥に少し見える白い建物（9階建て）は中央大学附属龍山病院であった建物（現在は閉鎖中）。ともにKORAIL（韓国鉄道公社）が所有・管理中。再開発計画では、ここは高層ビルが林立している風景に変わるはずだった。

龍山鉄道病院時代には、道路に面したこの建物が本館として正面に据えられ、本館の後方の広い敷地に低層の病棟を多数配置し、本館や病棟間は渡り廊下で繋いでいくという平面展開がなされていたと推される。そういう病棟配置スタイルをパビリオン方式という。この後、病院建物は高層化し、病棟は平面ではなく建物の上層階に積上げていく現代の構造スタイルに移行していく。

日本敗戦によって朝鮮総督府は消滅する。朝鮮総督府鉄道局龍山鉄道病院は「国立ソウル鉄道病院」として継続していたようだ。私立中央大学医療院は1968年に創設され、ソウルに附属ソンシム病院（350床）を持っていた。2つ目の附属病院保有のニーズが発生し、1984年の公開入札によって国立ソウル鉄道病院を賃借することになり、鉄道病院は「中央大学附属龍山病院」になった。9階建て、敷地面積5,500坪、400床、27診療科、80名余の教授陣と700名のスタッフが教育と臨床にあたった。この病院は大学病院として優秀であったようだ。例えば、1999

写真3：装飾が少なくシンプルな茶褐色煉瓦表装の四角い建物に最上階は随所にアーチ窓を組み込んでいるデザインが秀逸。これほど荘厳で凛々しい姿の病院建物は多くない。韓国の医療の歴史を経験してきた竣工88年目の病院建物。

写真4：ツタの絡まる病院の茶褐色煉瓦壁。昭和初期の建物は煉瓦やタイルで表装され、荘厳で凛々しく、格調高い容姿になる。この建物は厚みのある壁面に彫り込まれた窓の上側アーチが柔らかい印象を醸し出し、美麗な仕上がりになっている。私は、鉄筋コンクリート造という新しい技術で造られ、装飾の少ない昭和初期のモダニズム様式の建物が好きだ。例えば、ソウル大学医学部校舎、旧・京城帝国大学本館、神戸大学経済学部/経営学部校舎、旧・新京市民病院、旧・東京第一病院などである。